
性転換で リア充ライフ！

エンナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

性転換で リア充ライフ！

【著者名】

ヒンナ

N5236Y

【あらすじ】

朝起きて部屋にある姿見を見るといつもと何かが違う。あれ？俺ってこんな可愛かったく……つてなんじゃこりゃ――――――！ある日ふと性転換しちまった男子校生のお話！

いちわ：じゃあこれはなんだ

俺は部屋にある姿見で自分の見た目を確認した。

どう見ても、いつもの俺とは違う容姿。

ふうへりとした体つき。
出る場所はしきかり出でいる。

女になっちゃった?

まさかー、そんなラノベとか漫画みてーな展開ねーよなーハハハ。

じ
や
あ
こ
れ
は
何
だ
?

心の中でありえないぐむし語ふ
じゅううつけ
「龍介ー？おきなわーい」

龍介？！それ俺の名前……………つーたあ、みんなの記憶の俺と

ガチャ、とドアが開き、お袋が入つてくる。ノックしろクソババア。

「あら？ 龍介の彼女？ 可愛いわね！」

そう言われ、俺は姿見をのぞく。
まあ確かに可愛いつちや可愛

二二二

11

無視かよ！無視なのかなよ！

き」と疲れてるんだわ」「なかつたーとこしゃがつた!! めかボックスじゃねーんだから

! !

「兄ちゃん遅刻するよー」

おおーお前は我が弟の竜太！

「…………」

「…………？」

「母ちゃん、オレまだ眠いみたい

お前もかい！」

「どうするー？俺！」

「あなたー、ちょっと見て頂戴」

親父呼びたがったクソババア！！！」

「どれどれ？龍介が女に……」「

と、俺を見るたび言葉を失う。

何か変かな……、服は着てるし、髪の毛も乱れてないし、まあ変つたら性別だな。

「…………龍介…………なんだよな…………下に来なさい」

説教モー――――――ド

「どうこうことだね、説明しなさい」

「って言われても、俺…………」

「…………はあ」

ため息つきてーのはこいつちだわー！！

あまりの展開に読者ついていけてねーよー俺もだけどよーー。

「何か、起きたらなつてた」

「今日は学校を休みなさい」

無視かよ。今日俺散々だよ。泣きてえ。

「あーー」

やることがないので、部屋にこもってゲームをしている俺。ノックの音がする。俺は返事をした。

入ってきたのはお袋だった。

「……洋服買いに行きましたよ」

やる気のなさそうな声で言つた。

「なんでー?」

「男の服じゃダメでしょ……」

「うーい

俺は（元）男だから、女物なんて全くわからなかつた。

全て、お袋と店員に任せた。

数着買つたところで帰宅することになつた。

「えー、学校いかなきや行けねーの?」

「こり、女の子なんだから口調に気を付けなさい」

「俺男だよー」

「まあそうね……」

「制服は買つておくから。先に帰つておいてくれる?」

「うーい

つーわけで、紙袋両手に一人で家に帰ることになつた俺だった。

このわ…じゅあいれはなんだ（後書き）

私はいつだって本気だ。

「わ…わ…わ…」

大分この体にも慣れたな。まあ一日なんだけど……。
お袋の買つてきた制服を来てみる。スカートなんて初めてだわ。
初めてのはずのスカートが妙にしつくりする。なんでだろーな。
よく考えたら髪の毛が腰まである長さだ。縛れるようなセンス
ないし、そのままつてのもなー……。

「入るよー、『姉ちゃん』」

ノックもなしに弟が侵入。

弟は中3のガキ。なんだけども。

女になつたとたん、身長が逆になるんだもん。あいつに見下される
なんてよ……。

それによつて、「姉ちゃん」なんて呼ぶなんて……殺すぞ……

「何? シャーペンの芯貰つよ」

「ちよ、待て待て。だつたら新品を上げよつ

「マジ? サンキュー」

あれ? こりへんに置いたはずなんだけど……。

「ねえ

「あん?」

振り返らず探しつづ答える俺。

すると、後ろから不意に腰に手を回される。

「ちよ? …」

待てつて! 近親相姦になる! つーかどこ触つてんの! ?

「なんですかー、あーんな憎い兄貴がこんな可愛い姉貴に変わるんだ

「う

「あ…せ…あ…」

「ありえねー」

体育系の部で鍛えた腕の強さは今の俺では勝てない。ゆっくりと回された手が上へ上へと上がる。

「……やめ……てってえ……」

涙声になりつつ言つ声。ほんつと情けねえ。

「……りゅうたあ……」

ぴた。

手が止まる。幸い胸にまで腕は回つてない。

「……ふえ？」

「……んな声出すなつて……」

「？」

振り向くと顔を真っ赤にした竜太がそこに居た。口を抑え、そそくさと逃げるようになつていつた。

「……？シャーペンの芯は？」

さんわ・オレなんだ！！

翌日。

俺は女子の制服で階段を下りていた。

うう…………妙に足がスースーする……。寒い。

「あ…………」

そこで、あの弟にあつた。

まるで、何か悪いものでも見つけたように咳いた。

俺はポケットから芯を取り出し、突きつけた。

「昨日、渡しそびれたんだけど

ちょっと怒り気味で。

どうしても、下から竜太を見上げる姿勢になつてしまつ。頬を膨らませ怒つたせいか、萌える構図に近いポーズになつてしまつた。

奴の反応はというと……。

昨日と同じく口を抑え、真っ赤に顔を染め、目を泳がせている。使えなさそうだったので、胸ポケットに芯を押し込む。

お腹空いた。朝食を腹に入れますか。

竜太をスルーしようと横を抜けたとき。腕をつかまれた。

「は？」

「…………あ、いや、なんでもない」

…………、だつたら手を離してくれますか。

「離してよ」

「…………！　ごめんッ」

半ば振り払うように竜太は俺の手を離した。ちょっと痛いんですけどー。

まあそんな事はさて置き朝食朝食

今日は…………、田玉焼きにはむ、トーストって普通…………。

ねーえ、
龍介。

お袋が突然話し出す。

「今日から「りゅうな」って名乗りなさいな。」

「はー！？」

まあ、そりだよな……。

「人称もしつかりね」とお袋。

二十九回 金力川の死

「あ、あとね、あんたら本当の兄弟じゃないから」

何を唐突に言つんだい……つて、は？

—きこえた—?

……あ、そういうば……。

似てる名前だから仲良くなさいね」二つ言われた記憶があ

卷之三

真実を知った俺は、重い足取りで荷物を

真実を知つた俺は
重い足取りで荷物を取りは向かつた

外に出ると奴がいた。
まるで、俺を待ち伏せていたようだ。

「可也。」羅曰：「如也。」

俺はその先を聞きたくない

「え...うん...」

そんなこと知ってるけど？みたいな返事をする竜太

？」

呼び止められ、嫌々振り向く俺。
嫌でも振り向かないと無視し

てるみたいで気持ち悪いじゃん。

「姉ちゃんを女にしたのはオレなんだ！――！」

「……。嘘だろ……。なんの利益があつて……。

「オレ、姉ちゃんが好き……」

「何言つとるんですか。

「さ……最初は惚れ薬を科学部の部長に作つてもうあつと思つたんだよ。

だけど、あいつが世間体を考えるつて……。で、でも！オレこれで満足してる」

な……何を馬鹿な……。これは現実か！？つーか満足すんな！俺の弟がこんなにホモの訳がねえ……。死にてえ……。

「き、きいたる！？オレらは兄弟じゃねーし……な？」

「な？」じゃねー————し————！」

俺が叫ぶと、それが想定外だつたらしく、ぽかんとしている。「オ……私はあんななんかと付き合つ氣はない！」

「だけどおー！」

「あんたもそこそこモテるんだろ！？」クつた美人とリア充つてろ！――！」

捨て台詞を吐いた俺は、なるべく追いつかれないよう（ついつても相手は体育系）

全力で走つた。後から追う人影は全くもつて見えなかつた。

学校

えーっと、まずは教務室に……と。

自分の内履きにはきかえたらまずいと思つた俺は、客用のスリッパを（勝手に）使う。

「失礼しまーす」

「ゆっくりドアを開けた。 電気がついている。

だが肝心の教師がいない。 早かつたかな……。

「^{ただ}多田君？」

「ぶわああーー？」

後ろからの奇襲。 ^{あかぎ}振り返るといたのは、クラスの担任・赤木だ。

「先生……、校内は禁煙ですよ」

朝からタバコを（しかも禁煙なのに）なんてこいつ……。

「ああ、すまんすまん、ハハハ」

笑い事じゃねーだろ。 ミスしたら火災報知器鳴るぞ！とか、^警察ざただぞ。

「で、多田君？」

「あ、はい」

「へえ、可愛くなつたねー」

と、俺のケツを触りセクハラする。

死ねという思いを込め、顔面パンチ。 メガネにや当ててねー。

奴は鼻から血を流しつつ、メガネを抑える。

「で、手続きとかいるんすか？」

「そーだなー、じゃあ俺とえっちなー」「死ね」

割りと俺は本気で言つた。

「…………とくにないよ。顔出してもらえればよかつた」

「あつや」

出でこなうと、ドアに手をかける俺。

「先生……いや、俺は本気だからな」

……。なにが？

「好きだぜ」ピシャン。

かき消すように勢い良く閉めるドア。 あんの数学教師イ……。

よんわ・貞操の危機

4話にしてなんだが話を整理しよう。俺の中じゅうでひたすらキヤバ
オーバーおこしてやる。

えーっと、まあ俺が弟のせいで女になたことはいいだろ？嫌でも理
解な、はい〇〇。

んで、弟と俺は実は兄弟じゃなく、しかもあいつは俺が好き…………。
更には数学変態教師も俺が好き（まあ本気かは知らんが）…………と。

俺の貞操の危機じゃね————ツカ————！————！————！

ヤバイヤバイヤバイ！ 女になつてから世間体的には問題ないし、
相手らのやりたい放題じゃん！！ しかもこの体じゃ抵抗するに出
来る力もほほない！

…………死ぬ。

とまあ、一人自室で宿題をしつつ悩む俺だったんですね、はい。
いやー、一人はいいね！心が休

「姉ちやーん」

ノックもなしに竜太が入ってきた。

「きやあああああーー！」

一応叫んでおいた。 女声で。

「勝手に入つてくんなつつたろ…………」「
「ごめんごめん」「…………つたく、…………で、何かよつあんの？」「
「え、いや、別に」

じゃあ帰れよ、お前。邪魔だし。まあ、暇になつたわけだから言える立場じゃないんだけど。

「ねえ」

リュウタは妙に甘い声で言った。身震いする。

「……なに？」

「姉ちゃんが欲しいよ。オレ本気なんだよー。」

お…俺は本気じゃねーし… つーか姉ちゃん呼ぶな！俺は男だつーの！！

「姉ちゃん、姉ちゃん……」

なんだこいつ気持ち悪い……。

「……りゅうな」

ぞくりとした。鳥肌が立つたほど。

嫌だ。名前を呼ばれると言つだけで感じてしまつた自分が。

そして、小さく心の中で喜んでいた自分が。

「……。」

しばらく沈黙が続く。何か話さないと…。

多少涙目になり、両手を胸の前に置き、おひおひと皿を泳がせる俺。

まるで欲しいものをねだるよつな女子。

「我慢できない」

それだけ、はつきりと響いた。今まで張つていた何かがぶつりと切れたようだ。

「や……ちょ……つ」

いきなり竜太は俺の手を掴み、俺をベッドに放る。

「……うあ……」

激しく倒れたせいか、少し痛い。

それにも構わず、竜太はネクタイを緩め、俺にのしかからうとして

いる。

これは本格的にやばい！ ドアはきつたり閉めてあるし……！

そんなことを考えているうちに、あいつは動いていた。

竜太の手が俺の頬と髪に触れる。

愛らしそうに指先で、頬から首へ流れるようにゆるりと撫でていく。

「…ひやあ…」

くすぐったい。

そして、自分で情けないぐらいの声が出る。

竜太が俺の制服のボタンに手をかけたとき

「一人ともーー！」飯よー！

と、階下から救いの手。

竜太は「チッ……」と舌打ちをして手を引いた。怖いです。

「残念だつたね、また今度続きをしようつか

「…………しねーよ、バーカ」

「うわそりやめ

と俺は箸を置いた。すると、

「待ちなさい」

と親父が珍しく俺を呼び止める。

「学校はどうだった

「別に？」

あの教師を除いてな。

「友達も、か？」

「ああ」

変わりなく男友達とつるんでるぜ。

逆に女に絡まれるのが多い

な。

「 そうか、ならいい」

「 んだよ、心配してんのか?」 うちのクラスは比較的仲いい奴らの集まりだしな。

もし男子に突き放されても女子とやつてける(気がする)。
まあ、あの変態教師が担任つてのが嫌だよなあ。

「 うん、大丈夫」

と親父を安心させるかの様に俺は笑った。

ふと考へると、この体……戻れないのか?
明日中学に乗り込んで聞き出してみつか。
つーわけで、おやすみー

「わ…おまじない

放課後

俺は嫌々ながらも、弟の学校の門前にいた。
奴から聞き出したといふ、頼んだ相手は科学部。なんとまあ非現実的な……。

中学生の科学部でも性転換する薬なんて作れねーだろ、おい。
どーやって聞き出したか? んなもん関係ねーだろ……。

俺は怪しい理科室の前で足を止めた。 絶対ココだ。
声は一切しない。 怖いぞ、おい。

ノックをし、ドアを開けた。

無駄に暗い室内。 よくわからない異臭。

「誰」

端的に返される。 多分部長だわ。

「あーっと、多田です! 多田竜」「ああーー話は聞いてるよーなにせ
超絶……」

云々云々。 俺の話をする彼。

「えーっと、そーゆーのいーんで、戻し方とか

「戻す? 無理無理無理!」

否定された?!

「じゃあ、戻せねーの! ?

「勿論だよー、そつそつそつ。」

肯定された?!

「しつかし可愛いね奥の部屋でゆづくつ話そつか

「年下にセクハラされる! ! !」

失礼なことを言つてしまつた! そしてセクハラなら弟に散々やら
られてるぜ! !

「えーっとなぜ二人きり?」

「にこにこと、頬杖を付きながらに向き合つ部長さん。

「気にしないでくださいよー、ちよーっと二人で話をしたかつたでけつすよ」

「じゃあなんで鍵なんて掛けてるんですかあ?……なんて俺にや聞けねーよ。そしてそのほほ笑みが怖い。」

「へえ……」

ジロジロと人を見るな。 そして黙るな!

黙つただけではない。 俺の顔をじっくりゅつくり見ていく。

その目は、科学の観察なんかじゃなく愛するものを見るような目。

「本當だ」

微笑みがにやつきにかわる。

「な……何?」

「可愛い」

……俺帰るね

「あの、用事終わつたんで帰」

立ち上がつたとき、腕をつかまれる。

「まあ……待つてくださいよ……ね?」

「…………ッ」

文科系だからといって油断した! 竜太ほどじやないけど、力が

強い。

ましてや俺は今女だつたこと忘れてた……。

ぎゅう、と力が強くなる。

「…………いたつ」

「おおつと」と手を離してくれた。

「…………」

「すみません。ついつい我を忘れて
忘れてたの！？ この人ある意味怖いよ……

中学を後にした俺は重い足を家に向か進める。家帰りたくねー。

家の前には、弟が立っていた。

「！…………ただいま」

「おかえり、りょうな」

「あなたが俺の名前呼ぶとうぜーわ」

竜太は「あはは」と笑うだけだった。あ、そだ、今日は鍵かけてねよーっと。

…………宿題終了……と。

そう思いつつ俺はペンをおいた。そして、窓越しに空を見る。黒く空が曇り始める。携帯を開き天気予報を見た。

「…………」

表示されていた単語に絶句する。…………「嵐」。アイドルグループじゃない方の。

…………嵐ー！？…………と思いつと外がぴかりと光った。

俺は肩を震わせた。

高校生……しかも男子で言つ物アレだが……俺は心底雷が怖い。

「や…………」

誰か…………一緒に……。

俺は身を縮め、目を固くとじる。

「姉ちゃん」

後ろから聞き覚えのある声がする。振り返ると奴がいた。

「……竜太あ」

泣き出しそうな声で俺は言つ。

あいつが嫌いだけど苦手だけど不本意だけど、それなんかより雷が俺は怖い。

誰かといたい。

「昔からダメだつたよね、雷。でも大丈夫。」

優しく言つた。

そして、奴は俺の肩に手を置いた。

「……？」

顔をゆっくり俺へと近づけ

「……え？」

静かにキスをした。

「おまじない」

そつと言い、不敵に笑む。

「ば…バカ！」

俺は力の限り竜太を叩く。 だけど、力が入らない。

そんな弱々しい抵抗に奴はただ微笑むだけだった。

今度は…雷どころじゃねーよ…心臓がッ…！

「おまじない、大事にしてね。オレのこと、 “スキ” になるおまじない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5236y/>

性転換で リア充ライフ！

2011年11月23日13時46分発行